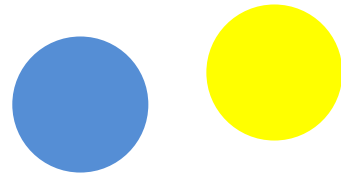


聴き合い・語り合い ～AKB大作戦～



ハイライト：

- ・「聴き合い・語り合い」は、「伝え愛」の場
- ・発達段階に応じた「聴き合い・語り合い」の姿
- ・「聴き合い・語り合い」が効果的な場とは
- ・「聴き合い・語り合い」を生み出す手だてとは
- ・「聴き合い・語り合い」を支える3つの条件整備

「聴き合い・語り合い」は、「伝え愛」の場

子どもの目が輝く学習をつくり出していくための中核となる手だてとして、「聴き合い・語り合い活動」を設定しています。

「聴き合い・語り合い」の意味を考えると、「伝え合い」と言い換えることができます。しかし、久原小学校がめざしている交流活動は、「伝え合い」ではなく、「伝え愛」なのです。具体的には、次のような姿になります。

- ・心で聴いて相手を理解しようとする。
- ・正しい言葉で自分の考えを表現する。
- ・相手の考えのよさを認め自分の考えを生かす。

交流活動における子どもたちの表現を、自分も相手も尊重する表現（アサーション）へ高めていくことが、子どもたちの目の輝きにつながっていくのです。

ここで、算数の授業におけるアサーションとは、どのようなものになるのか、より具体的に整理していきます。例えば、「見通し」の段階では、次のような姿をめざします。

【聴き合いの姿】

- ・相手の考えた内容や方法を、ただ漠然と聞くのではなく、自分なりの考えを明確にもち、自分の考えと比べ、相手の考えの意図を予想しながら聴いている。

【語り合いの姿】

- ・自分の考えた内容や方法を、数学的な表現を工夫して、相手にわかりやすく伝えている。
- ・相手の考えを評価し、自分の考えを付加・修正・強化して伝えている。

これらの姿は、他の段階でめざす姿としても置き換えることができます。

発達段階に応じた「聴き合い・語り合い」の姿

前述の「聴き合い・語り合い」の姿を、発達段階に応じて具体化すると次のようになります。

【低学年】・話し手を見る・うなづく・最後まで聴く・体の向き・声の大きさ・最後まで話す・理由をつける・順序よく話す

【中学年】・自他の考えを比べて話す・結論と理由を話す・具体物を使う・根拠をもとに話す・自分の立場を明らかにする・相違点や共通点を考えながら話す

【高学年】・メモしながら聴く・相手の考えを引用して話す・考えの根拠を事実やデータをもとに話す・要点をまとめたり例えを使って話したりする。

このように整理していくと、日常の授業で先生方が行っている交流活動そのものになるのではないのでしょうか。「聴き合い・語り合い」を難しく考えるのではなく、今まで積み重ねてきた当たり前のことを、改めてしっかりと実践していくことが大切なこととなります。

低学年で培った「聴き合い・語り合い」は、中学年で「聴き合い・語り合い」で高まり、そして、高学年での「聴き合い・語り合い」でさらに高まっていきます。学年の子どもに応じた「聴き合い・語り合い」を創り出していく時に、次の学年での姿をしっかりとイメージしていきます。

AKB 大作戦は、
聴き合い・語り合い
をすべての子ども
たちができるように
することです。



「聴き合い・語り合い」が効果的な場とは

授業づくりをすすめていくにあたって、「聴き合い・語り合い」の場が有効に機能する単元や指導場面を考えていく必要があります。

「聴き合い・語り合い」の場は、学習過程のどの段階にも設定することができます。しかし、授業の目的は、あくまで指導事項を達成することにありますので、「聴き合い・語り合い」によって育成される教科の能力をはっきりとさせておかなければなりません。そのうえで、指導事項にふさわしい「聴き合い・語り合い」の場を設定していくことになります。

このようなことを考慮すると、算数の授業では、数学的な考え方（思考力）

を育成する場面で、「聴き合い・語り合い」の場を設定していくことが効果的となります。ただし、数学的な考え方の育成は、集団解決の段階における交流活動に限らず、その内容と方法を工夫することで、他の段階でも設定することができます。

国語の授業では、指導事項に応じた言語活動として設定し、話す・聞く能力、書く能力、読む能力を育成していくことになります。その授業でどのような能力を育成するのか、つまり、授業の評価規準によって、「聴き合い・語り合い」の効果的な場は変わってくるのです。

「聴き合い・語り合い」を生み出す手だてとは

「聴き合い・語り合い」の場を、より質の高いものにしていくためには、どのような手だてを仕組めばよいのでしょうか。

久原小学校で一番大切なこととして挙げていることは、考えをしっかりともたせるということです。自分の考えが曖昧なまま交流活動に臨んだ場合、めざす「聴き合い・語り合い」の姿を生み出せないのです。自分の考えをしっかりとつくることができるように、時間を確保するとともに、よりきめ細やかな支援を加えていくことが、「聴き合い・語り合い」の場を成立させる第一歩となります。

一人一人の子どもたちに自分の考えをもたせた上で行う手だてについては、多面的に工夫していくことができます。

- ・オープンな問題を設定する
- ・問題提示の方法を工夫する
- ・グループ（ペア）交流の設定
- ・発問、補助発問を工夫する
- ・板書を構造化する
- ・学習ノートの構成を工夫する
- ・友達の考えを説明させる

この他にも、先生方のよさを生かした工夫により、多様な手だてを生み出していくことができます。

「聴き合い・語り合い」を支える3つの条件整備

「聴き合い・語り合い」の場は、子どもたちが「やりたくないなあ」、「どうしていいかわかんないよ」、「まちがっているから言いたくない」、「自信ないよ」などマイナス思考の気持ちと行動に走ると成立しません。

そこで、次の3のポイントを授業をつくる条件整備として、事前にはっきりと行っていきましょう。

- 1 語り合いたいという意欲がわく課題や教師の発問づくり
- 2 聴き合い・語り合いができる支持的風土づくり
- 3 発達段階に応じた交流のルールづくり

このような条件整備が基盤となり、真の「聴き合い・語り合い」が生み出され、子どもたちの目が輝いていくのです。